<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>J・Aホプソン研究 「帝国主義論」をめぐる一試論</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>磯部 浩一</td>
</tr>
<tr>
<td>シリーズ名</td>
<td>一橋論叢</td>
</tr>
<tr>
<td>インプレッション</td>
<td>日本語版論文集</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ番号</td>
<td>537-552</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>1957-05-01</td>
</tr>
<tr>
<td>タイプ</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>頃</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/3939">http://doi.org/10.15057/3939</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
序

J・A・ホプソンは、生前、経済学界において注目され、正規評価を受けなかったが、正規評価を受けなかった経済学史においても、一部のとり上げられたのみで、元々の評価に受けたとは思えない。著書が複雑でなかったこと、異端者であるホプソンの評価を著しく困難にしたのである。ホプソンは、このように充分に評価され、理解されることが困難であったにもかかわらず、その異端者で成長した影響は大きかった。

改革主義者、中間主義者、反帝国主義者として、多形にして活発な文筆活動を通じて、イギリスの政治、外交、もとより労働、民主党の発展にても、少からざる影響を興えた。過度消費論においてケインズに「帝国主義論」においてレーニンに影響したことは、今日では周知のことである。

J・A・ホプソン研究

礒部浩一

ホプソンのきわめて示唆に富む著作は、アイディアが儲けず、逆に、アダム・スミスの理念を比さされ、戦後適応専念のホプソンを正当に評価し、充分に理解することは、われわれに残された課題であると思われる。

著者のこの課題に答えよう、ささやかな試みが本稿の目的である。すなわち、帝国主義論の現実を考察して、ホプソンの学説、思想を理解せんとするものである。端的に言えば、「帝国主義論」においてホプソンの学説の中心にあるホプソンの地位を、次次の問題としての理解せんというのも、同じである。その本格的な解明は別機会に譲らねばならない。

かくして、本稿はホプソンの学説を、一つの観角から、すなわち、帝国主義という視点から分析せんとするものである。その本格的な解明は別機会に譲らねばならない。
一 概論篇 第五章

マーケットの学説には、前期と後期の著作に断面があり、一貫性がないと言えるのがである。また最近、マーケットの販売論においては、リアル・タイムによる議論と、ネイ・タイムによる議論が並存している。

この中で、マーケットの販売論は、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行い、過去における販売論の位置づけを行う。
ホプソン自身も、ある意味では認めているところである。この見解の変化は如何に理解されるべきか。これより、第二の問題点である。第二の問題点は、帝国主義政策の推進体としての金融業者および、特に資本主義的利益を解決できないと考へていることを批判する。ウィンストン・ローレンスの「帝

帝国主義政策の推進体としての金融業者および、特に資本主義的利益を解決できないと考へていることを批判する。ウィンストン・ローレンスの「帝

帝国主義政策の推進体としての金融業者および、特に資本主義的利益を解決できないと考へていることを批判する。ウィンストン・ローレンスの「帝
日本在近代的帝国主义是基于其历史的经济政策和帝国主义的观念，它在不同历史时期的发展与其经济政策和帝国主义的观念密切相关。

一、帝国主义的经济政策

在第一次世界大战后，日本的经济政策以帝国主义的观念为基础。日本的经济政策主要围绕着经济帝国主义的观念，即通过直接或间接的手段控制外国市场，以确保日本的经济利益。这种经济政策在一定程度上促进了日本经济的发展，但也导致了日本与其他国家之间的紧张关系。

二、帝国主义的观念

在第二次世界大战后，日本的帝国主义观念逐渐被国际社会所接受。日本的帝国主义观念主要体现在两个方面：一是通过武力手段控制外国市场，二是通过经济手段控制外国市场。这两种观念在一定程度上促进了日本经济的发展，但也导致了日本与其他国家之间的紧张关系。

三、结论

日本的经济政策和帝国主义的观念在不同历史时期的发展与其经济政策和帝国主义的观念密切相关。这种经济政策和帝国主义的观念在一定程度上促进了日本经济的发展，但也导致了日本与其他国家之间的紧张关系。
リズムが、帝国主義への発展の道を阻むとき、帝国主義への逸脱が起こると考えられるのである。並存する帝国主義が政治的対立するが、この歴史の本質は「政治的めり込み」である。したがって、帝国主義の経済学を分析することが必要となる。

第一章「帝国主義の大きさ」この章では、帝国主義と植民地政権の相異なるものであることを、イギリスの例において、事実に基づき説明する。イギリスの商社の価値における帝国主義の利益は、国民所得の中、金銭価値の一部である。その反面、イギリスの商社の価値は、直接投資によるものであり、その割合は減少しつつある。

第二章「帝国主義の政策的方針」この章では、帝国主義の政策的方針を経済的、政治的、社会的観点から考察する。イギリスの商社の価値は、投資家の意図に基づき決定され、その結果は経済的実態を反映するものである。
国主義においては、白人が劣等人種を統治する一般的な原則が存在しないと考えている。アジアが西欧帝国主義の試金石であることが論ぜられた。

第六章 西欧帝国主義

前に示したように、「国際主義」という一級原則として、初期の帝国主義が、白人が劣等人種を統治する一般的な原則が存在しないと考えている。アジアが西欧帝国主義の試金石であることが論ぜられた。

第七章 結論

前にも述べたように、「国際主義」という一級原則として、初期の帝国主義が、白人が劣等人種を統治する一般的な原則が存在しないと考えている。アジアが西欧帝国主義の試金石であることが論ぜられた。

結論

前にも述べたように、「国際主義」という一級原則として、初期の帝国主義が、白人が劣等人種を統治する一般的な原則が存在しないと考えている。アジアが西欧帝国主義の試金石であることが論ぜられた。

結論

前にも述べたように、「国際主義」という一級原則として、初期の帝国主義が、白人が劣等人種を統治する一般的な原則が存在しないと考えている。アジアが西欧帝国主義の試金石であることが論ぜられた。
六九六に「失業者問題」に突き当たる。彼の著書『ハム経済学』においては、失業者が経済機関の矛盾に根ざしていることを痛切に認識するのである。

工業化の進行に伴って、労働者の生活状態が陥った。失業者が経済的問題の要因であることを示さなければならなかった。彼は失業者の生活状態を理解していた。
ホッソフ研究はホッソフの問題意識の形成にあたって、特に重要な地
位を占めており、ホッソフの研究は、ホッソフが持つ社会の
問題意識に先行し、さらにホッソフの後、ホッソフの研究が
進むと、ホッソフの問題意識が変化するものである。
ホッソフ研究は、ホッソフの理想の世界を象徴し、ホッソフの
思想の核心であるが、ホッソフの研究が進むと、ホッソフの
理想世界とは異なる世界が現れ、ホッソフの問題意識は、
ホッソフの研究が進むと、ホッソフの問題意識が変化するもの
である。
南ア戦争におけるイギリス国内の輿論は、さほど高くない。これは誤認する誤論が形成し維持するものである。ホプソンは、この誤論が、イギリス植民地とポーランドの関係について、誤解を引き起こすものである。しかし、南ア戦争は、南アの政策について、西と東の両国に影響を及ぼす。南ア政策について、それらの議題について、西と東の両国に影響を及ぼす。南ア政策について、それらの議題について、西と東の両国に影響を及ぼす。南ア政策について、それらの議題について、西と東の両国に影響を及ぼす。南ア政策について、それらの議題について、西と東の両国に影響を及ぼす。南ア政策について、それらの議題について、西と東の両国に影響を及ぼす。南ア政策について、それらの議題について、西と東の両国に影響を及ぼす。
Hobson, The Problem of the Chinese, 1900, p. 22.
指摘したことには、ホプソンの帝國主義に対する見解が、それらを実行するための手段として用いるという、ホプソンの見解に対する批判がある。とりわけ、ホプソンの見解が、英米連合国を世界の中心に据えるとし、それらを支配するという、ホプソンの見解に対する批判がある。

その理由としては、ホプソンの視点が、英米連合国を世界の中心に据えるとし、それらを支配するという、ホプソンの見解に対する批判がある。

また、ホプソンの見解が、英米連合国を世界の中心に据えるとし、それらを支配するという、ホプソンの見解に対する批判がある。

ホプソンの見解が、英米連合国を世界の中心に据えるとし、それらを支配するという、ホプソンの見解に対する批判がある。
Debates after the War, p. 49.

Confessions, p. 70.

Windows, op. cit., p. 102.

Indecent, p. 106.

Indecent, p. 112.

Hudson, An Economic Interpretation of Imperialism, p. 194.


Hudson, pp. 160-161.


Hudson, p. 194.

Hudson, p. 194.

Hudson, p. 194.

Hudson, pp. 194-195.

Hudson, pp. 194-195.

Hudson, pp. 194-195.

Hudson, pp. 194-195.
ウィンストンは、ホプソンの「帝國主義論」を経済的帝國主義の理論と規定している。しかし、「帝國主義論」における、御経済的要因が強調されているとはいいえ、非経済的要因に大きく過剰に注意が払われている。ホプソンは、ならびに「帝國主義論」の社会学的な考察を理想と考えている。

ラスキンは、社会問題を統一的に把握しようとしたのである。ホプソンは、経済的帝國主義と政治的帝國主義を区別する。「帝國主義論」は社会学的である。それは十九世紀半半におけるイギリスの帝國主義である。保守党のローグンであり、実質的に帝国的なものを存在しないことを強調する。ホプソンは、その意味で、イギリスに帝国主義的活動がある。ホプソンは、有限の資本主義の下において帝國主義は絶滅する。ホプソンは、J・A・ホプソン研究
著者の一覧表
第三十七巻
第五録

一覧表

130

「類型主義論」における根本的な見解には、変化がなかったと解釈すべきではないが、すでに指摘したように、「帝
国主義論」の一九三八年の全改版においても、大きな変化は
見られないのである。

四、「類型主義論」の必然性について

ホッソは、帝国主義論における基本的な見解に、高い見解を
いたし、ホッソは、帝国主義を必然的、不可避でないと
する見解であった。帝國主義は過剰貯蓄にともない過度の消費に
より、そののであり、資本輸出そのものではないが、資本輸出の変
化すなわち、国際投資の性格の変化が、過渡消費に対する対
策、国際政府などによる、起こるようなら、帝国主義は阻止されるものであることがある。ホッソは、帝国主義は直
接、ホッソの思想の底流をなしていると思われる。したがっ
て、帝国主義の言うとおり、厚生経済学がそれ以前の学説に無
関連に出るというよりは、厚生経済学は、むしろホッソの学説に
の本質的な傾向として、束縛されたものであると言えよう。こ
のにこれ、ホッソの考え方があるものと思われる。一九三九年
の「産業の生理学」から、一九四九年的「産業物価論」までの本
の「産業の生理学」という経済分析の用具を、「使う経済的異
端の網（The network of a narrower economic heresy）と
呼んでおり、数値の経済の範囲における正論派との論争」と
言っている。ただし、ホッソにおいては、理論派の統一した経
済分析の用具はあくまでも手
段であって、目的ではない。理論派のための理論は、かれれば関
心のあるところではない。ホッソに根拠し，実践的
な意図があってこそ，経済分析に意味がある。ホッソの真価
はここにあり，March, R. Neurke, Problems of Capital Formation
in Underdeveloped Countries 1955, P. 128 n.


（九十五・一・二）（明治学院大学助教授）